

告発！「医療過誤」の現場から

写真 伊藤隼也

「告知も説明もせず娘を殺した医者よ！」

神奈川県相模原市
馬場恵美子さん
(当時16歳)

「恵美子の死は、いまでも信じられないほど」、「突然」のことなんです」

馬場鋼平さん(55)・キヨ子さん(55)夫妻を突然襲った、たった一人の愛娘の死は二人の心身を破壊し、キヨ子さんは最近まで入院を繰り返すほどであった。その悲しみと悔しさは、5年が過ぎた現在でも何ら変わることはない。

恵美子さんは先天性心臓疾患を持って生まれた。小学校卒業を間近に控えた89年8月、恵美子さんは体調を崩し、北里

大学病院(神奈川県相模原市)に入院、治療を受ける。その後、日本一の病院だと思っていた「綱平さん」、東京女子医科大学病院小児科に転院。検査の結果「拡張型心筋症」と診断された。この病気はいまだ完治させる治療法もなく、心臓移植しか助かる道がない不治の病であった。しかし主治医は馬場さん夫妻に対し、「内科的治療でいきましょう。大丈夫です」と簡単に話し、この病気がいかに難病であるのか、さらに心臓移植以外に治

る方法がないことは伝えなかった。欧米では常識化しているインフォームド・コンセント(説明と同意)がなされなかったのである。

中学1年の夏休み前に恵美子さんは退院。両親は医師の言葉通り「病気はただんだん回復に向かっている」と思っていた。

「毎日決められた薬を飲む以外は、年9回の定期検診を受けるだけで良いと言われていました。体調を崩したときでも医者には「家で寝ていれば治る」と言われて……。たしかに回復したので私たちも安心していました」(綱平さん)

傍目には元氣そのものに見えた恵美子さんだが、高校2年生の5月ごろから少しずつ体調を崩していった。

7月半ば過ぎに6日間入院した後、7月30日に再入院。そして約1カ月後の93年9月3日、恵美子さんは16歳という若さで他界した。両親にとっては信じ難いほどの「急死」だった。

馬場さん夫妻に対して、医師から病状についての説明はまったくなかったが、実際は病は徐々に進行していた。再入院した時には移植手術もできないほど悪化し、病院側はターミナルケア(終末医療)を行っていたのだ。

恵美子さんの突然の死に納得のいかない両親は主治医に説明を求めた。

「ずっと私たちに「大丈夫、心配ない」と言っていたのに、あとになってまったく逆の「1年前から徐々に悪くなっていった」なんてことを言うんです」(キヨ子さん)

それならば、なぜ移植手術を薦めなかったのか？

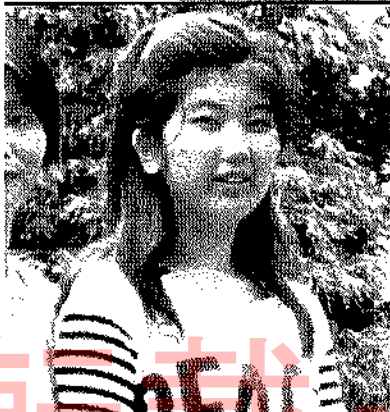
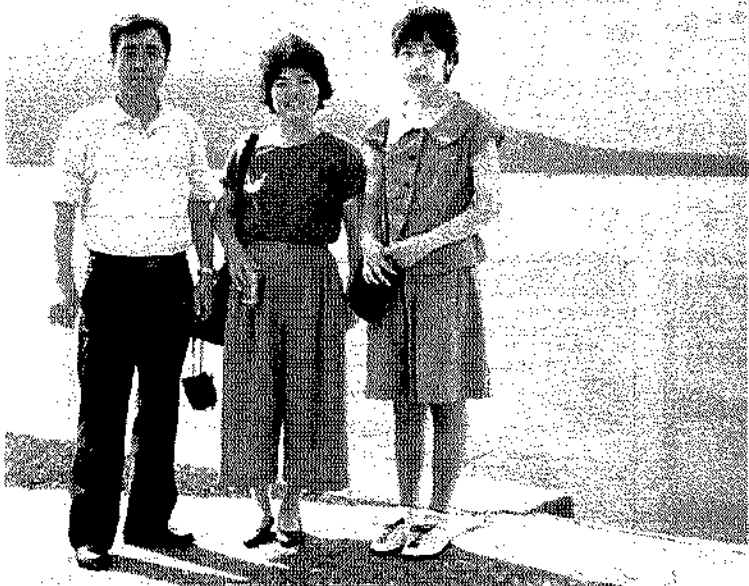
「移植手術は何千万円もおカネがかかるし、寄付を募るとなれば社会に迷惑をかけるというような答えでした。保険の適用外だからとも言われました。人の命を救うのに保険の枠なんて関係ないじゃないですか」(綱平さん)

当時、心臓移植は日本では不可能だったが、外国では日常的に行われていた。東京女子医大でも以前から米国とのルートがあり、二人の患者が手術を受けていた。充分、可能だったのである。しかしそれ以前に、両親への正確な病状の告知・説明は医師の義務ではないのか。

医師の勝手とも言える独断から、移植という最後の可能性さえ奪われた恵美子さん。

「娘の命を奪った医者を許せない。勝ち負けではなく、この私たちの思いや考えを社会に問いたい」と、馬場さん夫妻は、医療過誤裁判を起した。

主治医の回答は「裁判中なのでノーコメント」。医療現場の閉鎖性が生んだこの悲劇を繰り返してはならない……。



▲中2の夏休みに、母・キヨ子さんの実家がある鹿児島へ旅行したときのスナップ。読書好きだった彼女は生前「キラリヤ神話」をこよなく愛し、「将来は女優になりたい」と両親に夢を語っていた

◀母・キヨ子さんが一番大好きな恵美子さんの写真「これは小学6年生のころの恵美子さんですが、とても元気で体格も良く、身長は160cm以上もあって、同級生より頭ひとつ飛び出していたんですよ」



いまだお葬式前に父の墓に泣かされた眞実さんの遺骨は両親の深い愛しきを感じさせる。9日の土曜日に納骨をしようと思っていますが、気持ちの整理がなかなかありません。(眞平さん)